

英国のパストラル・ケアの発展過程に関する研究

新井英靖*

(2009年9月15日受理)

A Study on Developmental Process of Pastoral Care in the U.K.

Hideyasu ARAI

キーワード：英国, パストラル・ケア, 生徒指導, 特別ニーズ教育

本研究は英国における1950年代～1980年代にかけてのパストラル・ケアの発展過程を明らかにした。その結果、1950年代以降の英国では、不適応児等の特別なニーズのある子どもに対応するために、学校という「組織全体」の中に特別な場を用意し、専門的に対応しようとしていたパラダイムから、学校にいるすべての子どもを分離することなく、学校全体を再組織化して支援していこうとするパラダイムに変化していったことが明らかになった。こうしたパラダイム転換が生じる背景には、生徒の引き起こす行動上の「問題」にだけ目を向けて特別な対応を展開するのではなく、カリキュラムを含めた全人格的な発達を促進していく必要性が認識されるようになったことや、教師個人の対応ではなく、ホール・スクール・アプローチといった「チーム支援」を前提とする教育実践が進められたことが挙げられる。本研究を通して、英国では、こうしたパストラル・ケアの発展があったことが、1981年教育法以降の個に応じた支援システムの確立につながったのではないかと考えた。

1. 問題の所在および研究の目的

21世紀に入り、日本では特別支援教育の改革が進められた。2006年の時点で日本全国の小・中学校の96%以上の学校で特別支援教育コーディネーターの指名および校内委員会の設置が進められるなど、近年の体制整備の進展はめざましいものがある¹⁾。こうした体制整備とともに、現場では学習障害等の特別な教育的ニーズをもつ児童生徒に対し個別の指導計画が作成されるなど、通常の学級における特別支援は一定の成果が見られる。

しかし、日本においては、21世紀に入っても知的障害特別支援学校の在籍児童生徒は増加傾向にあり、また情緒障害児のための特別支援学級の在籍者数および設置学級数の増加は顕著である（文

*茨城大学教育学部

部科学省, 2005 : 文部科学省, 2007) 2)。こうした特別な場への措置数が増加傾向にある背景に、情緒的な困難を抱える子どもへの対応方法が通常の学級内で確立していない点があることが指摘できる。そして、情緒的な困難を抱える子どもの中には、発達障害児のみならず、虐待を受けた子どもなども含まれ、現場レベルでは特別支援教育の対象者が多様であることも考慮に入れなければならないだろう。

発達障害等の学習困難児をできる限り通常の学級において支援することを原則としたインクルーシブ教育を展開している英国においても、情緒的な困難を抱える子どもに対する対応は実践課題の一つとして挙げられている (Ofsted, 2004)。もともと、英国では学校心理サービスが早い時期から開始されており、情緒的な困難を抱える子どもへの対応は、教育心理士や教育福祉官など外部機関の専門家が地域で多様に支援できる体制を整備してきた (新井, 2007)。しかし、近年、インクルーシブ教育を推進するためには、外部機関の専門家による支援のみならず、通常の学級のスタッフの専門性を向上させ、学校全体で支援する体制をつくることが重要であると指摘されてきた (DfES, 2004)。

これまで、英国のインクルーシブ教育に関する研究では、学習困難児に対してリメディアル教育等のような「特別な場」による指導を提供することのみならず、通常の学級の授業を改善する必要性があると指摘されている一方で (新井, 2008)、通常の学級の情緒的な困難を抱える子どもに対し、「パストラル・ケア」を学校全体から提供できるようにしなければならないという指摘もされてきた (Carnell, and Lodge, 2002)。

ただし、英国のパストラル・ケアについては、日本においては、その概要が紹介されている程度にとどまっておる (ダフネ・ジョンソン, 1983 ; 藤井, 2004)。そのため、英国においてパストラル・ケアの発展が特別ニーズのある子どもへの対応として、どのように寄与したのかについて、詳細に研究されてこなかった。そこで、本稿では、特別な教育的ニーズのある子ども、特に情緒的な困難を抱える子どもに対応する学級経営・生徒指導を学校全体からどのように提供していくかを検討するために、英国のパストラル・ケアの発展過程を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

本研究では、英国のパストラル・ケアの発展過程を以下の視点から分析する。英国では戦後の混乱がおさまった 1950 年代以降、不適応児問題が深刻化するなど、通常の学校で情緒的な困難を抱える子どもの教育問題に焦点が当てられてきた (新井, 2000 ; 新井, 2002)。こうした先行研究をふまえて、本稿では、1950 年代以降の不適応児等に対する対応の方策としてパストラル・ケアがどのように位置づけられるようになったのかを明らかにしたいと考えた。

具体的には、英国 1950 年代には、学校心理サービスなどの外部機関を活用して不適応児問題に対応していたが、1950 年代以降にどのような過程を経てパストラル・ケアを主軸とした対応へと変化していったのかについて明らかにする。その際の分析の視点として、

- ① 学校心理サービスなどの外部機関の役割はどのように変化していったのか
- ② 不適応児等が通う学校や学級における教科指導及びリメディアル教育の提供とパストラル・ケ

アの発展がどのように関連しているのか。

③ パストラル・ケアの視点が通常の学校や学級の中にどのように浸透していったのかの3点を分析することとした。以上の点を明らかにする中で、パストラル・ケアが学習困難児への対応として学校内にどのように位置づいていったのかについて検討したいと考える。

なお、分析の対象とする資料は、1950年代以降の不応児問題への対応を検討した政府報告書および、1960年代から1980年代に英国のパストラル・ケアの発展に寄与した研究者が執筆した書籍等とする。

3. 学校心理サービスなどの外部機関の役割の変化

(1) カウンセリングとガイダンスからの脱却

1960年代までの英国の通常学校では、学校カウンセリングは「問題行動を起こす生徒に対し特別な対応をする」ための支援サービスであった。1955年アンダーウッド報告では、不応児に対応するために、精神科医や教育心理士、あるいは精神科ソーシャルワーカーを増員して対応する方針が示された (Ministry of Education, 1955)。

英国では、1960年代までに、学校カウンセリングや教育心理士の位置づけが明確になり、学校心理サービスが定着した。こうした中で、1968年にサマーフィールド報告が出されたが、「教育心理士という人はストレスの兆候を示す子どもや学校でつまづいている子どもを支援することができる存在であるが、こうしたことができる人というのは教育心理士だけではない」と指摘した。そして、「英国心理学会は、子どものストレスに関してアドバイスができる唯一の人が教育心理士であるという見解はとっていないし、教師やカウンセラーとして働いている他の人たちが適切な心理学的知識を普及していくことを歓迎している」ことを指摘しながら、英国教育科学省も「この見解を支持する」と述べた (DES, 1968, 27)。

このため学校では専門的養成プログラムを受けている教育心理士と学校の中でカウンセリング的な立場で子どもと対応する立場の教員が「密接に連携していなければならない」と考えた (DES, 1968, 27)。また、「教育心理士は障害児や学習遅進児の判別、ケア、教育に関する複数の専門分野のチームの中に加わるが多くなっている」ことも指摘された (DES, 1968, 64-65)。こうした中で、教育心理士は「生徒のニーズをアセスメントする」ことや、「特別学校 (special school) への照会」、「リメディアル教育指導の提供」などといった従来からの役割に加えて、「教育当局に所属する学校医学官との連携」や「特別な教育的トリートメントに対する教育組織の整備や助言」といった多様な役割を担うことが求められるようになった (DES, 1968, 65-67)。さらに、学校の研究や発展に寄与したり、現職教育を担うなど、教育心理士は学校の困難を抱える生徒に対する総合的な支援計画を立案する役割を担うことが期待されるようになった (DES, 1968, 70)。

こうした中で、1960年代以降、生徒指導と教科指導を分離したものではなく、両者を関係づけて実践していくことの必要性が指摘されるようになった。たとえば、ドーズ博士 (Dr. Peter Daws)³⁾によると、1960年代には「クラス担任の教師は、…自分の生徒を個別的に理解し、生徒のことを十分に知り、生徒と十分な関係を築くことができるようになってきた」が、その一方で、「教科の専

門化が生じ、学校の実践と組織が分断されてしまうという変化が生じた」と指摘する。このため、「学校はすべての生徒や生徒の個別的ニーズに焦点を当て、適切に対応することができるようになる前に、(すべての教員が) パストラル・ケアの責任を共同で果たすことができるような適切な体制を機能させることが必要となる」と述べ、パストラル・ケアの必要性を指摘した (Braide, et al., 1970, 3)。

しかし、1960年代のパストラル・ケアは「個人的に困難やトラブルを引き起こす生徒に対して、教師個人が単に応答すること」を指す狭い概念であった。そのため、「1960年代に、パストラル・ケアの概念をより広げていく必要がある」ことに加え、「教育ガイダンスまたは職業ガイダンスをそれまでのものよりもより精緻にしていく必要がある」と考えた (Braide, et al., 1970, 4)。こうした中で、1965年以降、学校カウンセリングの見直しが検討されるようになった。ドーズは、「学校カウンセリングは子どもの人格発達と福祉を維持し、守り、促進していく責任を伴ったケア制度の一つであり、学校の質を改善することにつながるものである」と述べ、学校カウンセリングが1960年代の学校改善に一定の影響を与えたことを指摘した (Braide, et al., 1970, 4)。一方、ある調査によると、25人の訓練を受けたカウンセラーのうち「6人のカウンセラーは仕事をしている時間のうち55%~76%が授業場面であったが、17名のカウンセラーは授業をしている場面とは何ら、あるいはほとんど関係していなかった」と述べ、カウンセラーの仕事と教室での指導場面が切り離されているカウンセラーがいることが指摘された (Braide, et al., 1970, 5)。

ドーズはこうした中で、「カウンセリングは危機的対応あるいは治療的な目的で行うという意識があるけれども、より重要な目的はすべての生徒の人格的な成熟と対応スキルを促進するというポジティブなものである」と述べ、「『予防的な』メンタルヘルスサービス」へと位置付けをシフトさせていく必要があると指摘した (Braide, et al., 1970, 5)。そして、カウンセリングが問題を引き起こす生徒への対応ではなく、すべての生徒を対象にしたものになるのであれば、「健康・性教育や人間関係、社会性の教育、職業プログラムなどのような人格発達の問題についてグループワークしたり、学級で指導を受けたりすることも必要となる」。そのため、担任教師が行うクラスでの活動も重要なものとなり、「カウンセラーの中には、こうした教育活動に従事するカウンセラーもおり、また、教師がチームを組んで行っている人格発達指導をコーディネートする責任を担っているカウンセラーも何名か存在している」状況であった (Braide, et al., 1970, 5)。

また、「カウンセラーが学校と外部の複数の機関をつなぐ人として描かれる」ことや、「カウンセラーの中には、学校または家庭で保護者と面接することに多くの時間を費やしている」人もいたことを指摘した。ドーズはこうしたカウンセラーの役割の多様化を受けて、学校カウンセリングには、「カウンセラーの意図を理解してくれる同僚が必要であり、子どもの個別的な福祉全般を気にかけることが必要であると指摘した。また、ドーズは「カウンセラー自身が効果的で支援的なパストラルケアの役割をすすんで果たすことが必要である」ということも指摘した (Braide, et al., 1970, 5-6)。

(2) 中等教育学校におけるパストラル・ケアの発展

以上のように、英国では、1960年代末から学校で行われてきたカウンセリングやガイダンス機能を変化させる必要性を認識し始めていた。特に在校生が1,000人以上の学校が多く、多様な能力・

適性の子どもが通う総合制学校においては、カウンセリングやガイダンスの機能がとても重要であったが、1970年代にはその機能を大きく変化させる必要性があることがさまざまな研究者から指摘されるようになった。

たとえば、中等学校のガイダンスの研究を進めていたモア（Moore, B.M.）は、「生徒は理解していないことを選択することはできないし、学んでいないことを理解することもできない」という理由から、生徒ひとりひとりに寄り添うものへ変えていかなければならないと指摘した（Moore, 1970, 75）。すなわち、「たとえ生徒が正確かつ十分な情報を入手していたとしても、それにもとづいて行動できるとは限らない」ものであり、「人は正しい決定をすることができるようになるまでに、高いレベルでの人格的な発達をとげ、自身のアイデンティティや自己肯定感を高めることが必要である」と指摘した（Moore, 1970, 75）。そのため、「ガイダンスにおいて重要なことは、生徒を知り、人との関係性の質を意識することである」とモアは考えた。このようなガイダンスは決して、カウンセリング室内だけで行われていることではなく、「教科教育の教師もさまざまな学級集団ともっと向き合うこと」が求められると指摘した（Moore, 1970, 75）。

こうした中で、中等教育学校で注目されたのが「パストラル・ケア」である。1970年代に英国のパストラル・ケアを理論的・実践的に推進した指導者としてマーランド（Marland, M.）がいる。そこで、まず、マーランドのパストラル・ケア概念についてみていきたい。

マーランドは中等学校において「パストラル・ケア」が必要な理由をエリクソン（Erikson, E.H.）の「アイデンティティの危機」への対応という点から指摘した（Marland, 1974, 2）。特に、1970年代は「かつてないほどの社会的、経済的、または政治的な圧力が学校に通う若者にかかっている」ために、中等教育の伝統的なやりかたでは十分な対応ができない状況があった（Marland, 1974, 4）。そのため、中等教育では「近年、カリキュラム改革を大規模に行ってきた」が、そうした改革と並行して、パストラル・ケアを校内に整備することの重要性についても強調した（Marland, 1974, 4）。

具体的には、マーランドは、パストラル・ケアが「教科指導を超えたもの」であると捉え、学校内外の専門化されたサービスを提供することによって、パストラル組織を形成し、青年のニーズを満たしていかなければならないと述べた（Marland, 1974, 10）。このとき、マーランドはパストラル・ケアを「ビルの配管のような主要な構造」の「傍ら」に置いたのでは、「不十分である」と述べ、学校の根幹に位置づけるようにすることが必要であると主張した（Marland, 1974, 10）。

こうした主張は1980年に出された「パストラル・カリキュラム」の中で、より鮮明にされた。すなわち、パストラル・ケアは「個別のケースワーク」が重要であると考える一方で、パストラル・ケアの中には「教科教育のカリキュラムを含むものでなければ、それは不完全である」と指摘した（Marland, 1980, 151）。このため、マーランドの考えるパストラル・ケアは、チューターなどの「パストラル・チームが学校の中でカリキュラムを立案する」ことを前提とするものであった（Marland, 1980, 151）。

このように、従来の中等学校では、さまざまな特別なニーズのある生徒に対し、ガイダンス機能を働かせて対応してきたが、1970年代に入り、時代の変化や生徒の多様性を強く認識するなかで、教科指導にもパストラル・ケアの考え方を浸透させていかなければならないことが指摘された。

4. 教科指導及びリメディアル教育とパストラル・ケア

(1) 教科指導とパストラル・ケアの統合

1970年代以降、マーランドが指摘したようなパストラル・ケアの考え方が浸透してくると、パストラル・ケアは教師全体の問題あるいは学校全体の問題であると考えられるようになった。そのため、1970年代にはパストラル・ケアを学校で実践していくためには、これまでの教師像や学校像を大きく変えていかなければならないことが指摘されるようになった。

たとえば、ハイ (Haigh, G.) は、学校に存在する秩序 (order) にはカリキュラムや教科の成績でコントロールする「制度的な秩序 (instrumental order)」と、生徒の行動やマナーをコントロールする「表現性の秩序 (expressive order)」があるが、中等学校の教科教育の教師は主として制度的な秩序に縛られ、チューターなどの教師は主として表現的な秩序に縛られていると指摘した (Haigh, 1975, 7)。そして、パストラル・ケアは「社会福祉的な側面が強調されているにもかかわらず、学校に存在する表現性の秩序を多かれ少なかれ、是認するものとなっている」と批判し、学校の価値観そのものを変えていくことが必要であると指摘した (Haigh, 1975, 8)。

同時期、ハンブリン (Hamblin, D.) は 教科指導とパストラル・ケアを統合する必要性に言及した。ハンブリンは、著書『教師とパストラル・ケア』の中で、「中等教育では初等教育と比べて、教師と生徒の関係が貧弱なものであるとしばしば指摘されてきたが、…私たちは不適切な指導方法が行動上の問題を引き起こしているということをあまり考えてこなかった」と指摘した (Hamblin, 1978, 9)。

特に当時の英国の中等教育学校では、生徒指導上、問題のある生徒に対して提供されてきた主たる指導方法は、「言語的で、受け身的な」ものであったが、ハンブリンはバーンスタイン (Bernstein, B.) の理論を援用しながら、カウンセリングが必要な生徒は言語面で制約のある生徒が多く、こうした生徒に対しては「言語的に学習するよりも、視覚的に学習するほうを好み、また活動的なものが望ましい」と指摘した (Hamblin, 1978, 9)。そして、ハンブリンは、「最適な学習環境を創造することを含めて私たちの仕事を再定義しなければならない」と考え、「学校の中にパストラル・ケアに関するリソースセンターを創出しながら、指導技術や教材を開発していかなければならない」と述べた (Hamblin, 1978, 12-13)。

以上のような教科指導とパストラル・ケアの統合の必要性が指摘されると、パストラル・ケア概念そのものの再検討が行われるようになった。たとえば、ウィリアムソン (Williamson, D.) は、パストラル・ケアのシステムを「個別の生徒の教育福祉または社会福祉」に寄与するものであると広く捉え、教科指導のシステム (教科部門やその教師) と管理職、あるいは学校外のサービスなどのさまざまな部門を「統合したもの」として認識することが必要であると考えた (Williamson, 1980, 172)。そのため、パストラル・ケアを「標準的に商品化されたもの」のように、何か生徒を「ベルトコンベアーに乗せて生産していく」という「羊飼い状態 (pastoralization)」にするのではなく、「学校が提供するさまざまな学習環境 (learning situation) を意味のあるものとなるよう生徒を支援する」ものとしていかなければならないと指摘した (Williamson, 1980, 172)。これは、「学校の活動を多様にし、学習環境をより柔軟なものにし、また、生徒が利用できるキャリアライン (career lines) の数を増やしていく」中で、「積極的な意味ですべての生徒が学校を楽しめる」状態にして

いくことであった。ウィリアムソンは、そもそもパストラル・ケアとは、こうした状態を生み出すためのものであると考え、学校の学習方法やそこでの特別な対応に柔軟性がなく、「特別な装置や特別な実践」が重視された従来のパストラル・ケアとは区別して捉えるべきであると主張した (Williamson, 1980, 174)。

(2) リメディアル教育とパストラル・ケアの関連性

以上のように、パストラル・ケアと教科指導の関連性が指摘され、新しいパストラル・ケア概念の再構築が求められていた頃、ベスト (Best, R.)⁴⁾ は学校改革の視点をもってパストラル・ケアを再定義しようとした。

ベストの根底にあった考え方は、「教育システムの特定の法則が変わらないまま、(パストラル・ケアを整備して一筆者) 構造的な変化を起こしても、多くの場合、根本的な変化を引き起こすことはできない」というものであった。つまり、パストラル・ケアは学校全体の改革と連動させることが必要であるとベストは強調した (Best, 1977, 132)。

ベストがこうした見解をもつに至った背景には、能力別学級編成や総合制学校再編後の中等学校の実態がある。すなわち、どんなに中等学校の内部を多様化して対応したとしても、「社会階層格差が変わらないままでは、教育機会の不平等は改善されない」と考え、学校の実践も根底から変化させる必要があると指摘した (Best, 1977, 132-133)。

特に、教育の最下層に位置づいている生徒の多くに提供されている「リメディアル教育」は、「パストラル・ケア」と関連させて検討する必要があるとベストは考えた。そこでは、「パストラル・ケアのスタッフが学習をする上での障害要因を、個別的・情緒的・心理的に除去する一方で、リメディアル教育部門は、地理や歴史、英語、数学、科学などで見られる読みの困難や計算力の障害を明確化し、成長を促進しようとするもの」であると捉えた。そして、その上で、どちらの措置も「本当のところは分離することのできない統一体として認識されるべきものである」と指摘した (Best, 1986, 54)。

ベストがこのようなパストラル・ケアを構想した背景には、リーベンデール総合制学校 (Revendell Comprehensive School) の実践がある。リーベンデール総合制学校は、ロンドンのベッドタウン地帯にある学校であるが、持ち家世帯と貸し家世帯が混合していて、階層 3a・3b (会社員など、しかし経営者はいない) の職に就いている親が最も多く、次いで、階層 2 (中間階層) が多い学校で、階級 1 (専門職) の親は少ないという学校であった (Best, 1983, 21-22)。

こうした社会階層の生徒が通うリーベンデール総合制学校では、「進歩主義的な児童中心主義」を学校改革の基本的な考え方としていた。特に、校長は「選抜しないこと、拒否しないこと」を学校全体に対し常に主張しており、混合能力グループによる指導を展開していた (Best, 1983, 22)。そのため、リメディアル教育のような「分離された場 (エージェント)」で子どもに特別な対応を提供する「エージェント中心主義的な視座」を採用せず、あくまでも「児童中心主義とスタッフ間の緊密な連携」により教育を行っていた (Best, 1983, 94)。こうした視座はパストラル・ケアにおいても同様であり、リーベンデール総合制学校では、パストラル・ケアを担当するカウンセラーが学校に配置されているが、パストラル・ケア部門を校内に設けて専門的に対応する「専門家のエージェント」で対応する組織とはしていなかった (Best, 1983, 94)。

こうした実践を参考にして、ベストは、学校での指導カリキュラムとパストラル・ケア、リメディアル教育など、特別な教育的ニーズのある子どもの措置を「統合」して対応する「ホール・スクール・アプローチ (Whole School Approach)」を基本とした「支援教育 (supportive education)」構想を提唱した (Best, 1986, 60)。これは、「混合能力グループ、チームティーチング、オープンスペースでの指導計画、経験的な学習、調べ学習中心の指導方法」などの方法を組み合わせ、通常の学級ですべての子どもの学習ニーズに応じることができるようにするものであった。また、教科担任や生徒指導を担当するチューター教師の間で学校内の諸資源を連携させる「支援教師 (support teacher)」を置くといった構想であった (Best, 1986, 61-62)。

具体的には、「学年のチームは2週間ごとの学習のまとまりを含めたシラバスをつくり、2週間の授業を計画し、準備する。通常、2週間に1回のミーティングが各チームで行われ、教師間で授業の内容やその提示の仕方、あるいは反応の仕方や追加的な資源を決定し、簡易的な文書 (ドキュメント) を作成し、合意が得られれば、リソースセンターに生産を依頼する。リソースセンターはすべての教師の補助することに責任をもつ」というような「チーム支援」の構想を明示するものであった (Best, 1986, 61)。

5. ホールスクールアプローチとパストラル・ケア

(1) 学級の雰囲気大切にすパストラル・ケアの必要性

以上のベストのパストラル・ケア論を総合すると、パストラル・ケアを校内に浸透させるためには、パストラル・ケアの担当者を決めて、その担当者が専門的・独占的に対応するのではなく、ホールスクールアプローチ (Whole School Approach) を確立することが重要であるということであった。1980年代には、こうしたベストの考えを具体化するための方策が検討された。

中でも、ワトキンス (Watkins,) は、「学校が社会的不利のような社会的側面を完全に補うことができる十分強力な社会的機関 (social agency) とはなっていないが、学校は教育的不利を生じさせる社会的不利を多かれ少なかれ予防することができる」と考え、ホールスクールアプローチを基盤として学校で訓育 (discipline) を徹底しようと考えた (Watkins, 1987, 38)。このとき、社会的不利を補うことができる訓育に長けている学校とそうでない学校とがあり、学校間で多様性がみられるが、学校ごとの違いは「(学校規模や建物の築年数、制服の有無などのような) 目に見える特徴」によるものではないとワトキンスは指摘した (Watkins, 1987, 38)。

すなわち、これまでの研究では、学校組織の中で、生徒の管理をどのように行うかに焦点が当てられていたが、1980年代以降は、「学校の雰囲気 (school climate)」や「生徒の見解、あるいは生徒自身の意思決定」といった、「学校のインフォーマルな側面」に注目するようになったとワトキンスは指摘した (Watkins, 1987, 39)。そして、こうした学校全体の雰囲気づくりなど、インフォーマルな側面に着目するようになると、特に中等学校で見られるような「別のやり方があるかどうかを吟味することなくお役所的なやり方を進めていこうとする」ことに対して、「大きな問題がある」と考えるようになった (Watkins, 1987, 40)。こうした問題を解決するためのものとして、「学校全体のレベルでは、パストラル・ケアによって学校のルールを修正していくための風潮を生み出して

いったり、フレキシブルな感じをもつようになることが必要」と指摘された (Watkins, 1987, 43)。

あわせて、「パストラル・チームは生徒の学校での反応を概観するところであるので、学校のカリキュラムを議論する際に強い立場で情報を提供すること」が求められ、学習指導面についてもパストラル・ケアが大きな影響をもつことが必要であると指摘した (Watkins, 1987, 45)。実際のところ、多くの中等学校では、「カリキュラムは教科の集合として認識されており、このことが多くの教科教師のアイデンティティであった」が、こうした特徴をもつがゆえに、「青年に提供されるカリキュラムが柔軟で、かつ、実用的なものになっていない」と指摘した。こうした現状認識の上で、パストラル・チームが「総合的な学習計画としてのカリキュラムを考え出し、学校のカリキュラムに存在している偏りや長所、短所を検証する」役割を担うべきであると指摘した (Watkins, 1987, 45)。

また、ワトキンスは、パストラル・ケアとカリキュラムの関連性について、一斉指導やグループワークの割合など、授業における教師の指導スタイルにも着目する必要があると指摘した (Watkins, 1987, 45)。このように、パストラル・ケアを学校全体から提供しようとする、学校の雰囲気づくりやカリキュラム、あるいは指導スタイルにまで広げて論じられるようになり、パストラル・ケアが特定の子どもに対する生徒指導であった時代とは異なる性質のものとして捉えられるようになった。

(2) パストラル・ケアにおけるコーディネート機能の重要性

以上のような議論をふまえて、パストラル・ケアと学校のカリキュラムを統合するためには、学校全体で改善に取り組む体制をつくることの重要性が指摘されるようになった。たとえば、ギャローウェイ (Galloway, D.) はそれまでのパストラル・ケアの議論を「パストラル・プログラム」の作成と「パストラル・チーム」の組織化という2点から以下のようにまとめた。

すなわち、パストラル・ケアに含まれる要素とは、「個人的・社会的・教育的・職業的なガイダンス」であるが、これらのトピックスは「多様である」ために、パストラル・ケアを以下のように構造化することが必要であると考えた (表1: Galloway, 1989, 34)。

このような構造をもったパストラル・ケアを提供していく場合には、校長や副校長などによって「コーディネートされた水平的なネットワーク (horizontal network)」を校内につくるのが効果的であると、ギャローウェイは指摘した (Galloway, 1989, 35)。特にチューターのコーディネーター役として学年主任の責任の大きさについて言及した。すなわち、学年主任の責任とは「パストラル・プログラムやチューターのプログラムを計画することが必要であるばかりでなく、一人ひとりの生徒の福祉を実際的に考慮するものでなければならない」とギャローウェイは考えた (Galloway, 1989, 35)。

このとき、「初等学校であれば、学級担任がこうした役割を担う」ことになるが、中等学校では、それぞれの生徒が1週間の授業を10人の教師から指導されるので、パストラル・プログラムを作成する必要に迫られていた (Galloway, 1989, 35)。もちろん、実際の中等学校では、「学年主任が自分の学年のすべての生徒の個別的なガイダンスに直接的に責任を持つことは期待できないし、教育的な進歩を概観することも責任を持ってない」。そのため、ギャローウェイは「チューターを組織す

表1 ギャローウェイによるパストラル・ケアの構造化

| 項目 | 内容 |
|------------------|--|
| (1) パストラル・ケア | 行政の概念であり、学校が生徒のケアと福祉をどのように提供するかに言及したもの。 |
| (2) パストラル・カリキュラム | (a) 学校をもっとも有効に活用するために、(b) 子どもの人格的・社会的発達を促進するために、(c) 選択教科や経験の選択肢の情報が手に入るように、子どもが学ぶべきすべてのこと。 |
| (3) パストラル・プログラム | パストラル・カリキュラムに即してどのように教えるかを示したもの。 |
| (4) チューター・プログラム | パストラル・プログラムの一つで、チューターによる指導の内容を示したもの。 |

ることがパストラル・ケアにおいて重要」であると考えた (Galloway, 1989, 35)。

このため、ギャローウェイはチューターなどの生徒の教育・福祉的支援を行う人にコーディネーターとしての役割を与え、以下の6点を組織的に提供することが重要であると指摘した。

- ① カリキュラム・コーディネーション
- ② 情報提供
- ③ 専門分野におけるガイダンス
- ④ カウンセリング
- ⑤ 支援サービスと他の機関との連携
- ⑥ 保護者との連携

こうした役割は特別なニーズをもつ生徒には特に重要であると考え、パストラル・ケアを学校全体で提供するためのシステムづくりの重要性が改めて指摘された (Galloway, 1989, 35-36)。

6.まとめと考察

本研究では、英国のパストラル・ケア概念が1950年代以降、どのように発展していったのかを明らかにした。すなわち、1960年代までは、教育心理士等の特別なスタッフが分離された場において特別な対応を提供していたが、1960年代になると、教育心理士に対しても学校内外での連絡調整役となることが求められるようになり、学校全体で生徒一人ひとりを見ていく体制づくりが課題となった。そうした中で、1970年代には、学校でトラブルを起こす生徒に対して個別的にカウンセリングをしたり、職業ガイダンスをするだけでなく、生徒の全人格的発達を支援していくことが必要と考えられ、パストラル・ケアに注目が集まった。こうした中で、パストラル・ケアは教科教育やリメディアル教育と関連性を持ちながら展開する必要性が認識されるようになり、カリキュラム

調整を含めた生徒指導の全体計画を担うものとして捉えられるようになった。

さらに、1980年代になると、カリキュラム調整を含めた全体計画を行うために、パストラル・ケアを基軸とした学校改革を唱える研究者も現れた。たとえば、ベストは学校のパストラル・ケアに関する機能を「支援教育」という枠組みで再編成し、学校改革の必要性が提起された。その後、ワトキンスやギャローウェイは、パストラル・ケアにおけるチーム支援の原則とコーディネート機能の重要性を指摘し、ホールスクールアプローチを実現するための方策が検討されるようになった。

以上のように、1950年代以降の英国では、不適応児等の特別なニーズのある子どもに対応するために、学校という「組織全体」の中に特別な場を用意し、専門的に対応しようとしていたパラダイムから、学校にいるすべての子どもを分離することなく、学校全体を再組織化して支援していこうとするパラダイムに変化していったことが明らかになった。こうしたパラダイム転換が生じる背景には、生徒の引き起こす行動上の「問題」にだけ目を向けて特別な対応を展開するのではなく、カリキュラムを含めた全人格的な発達を促進していく必要性が認識されるようになったことや、教師個人の対応ではなく、ホール・スクール・アプローチといった「チーム支援」を前提とする教育実践が進められたことが挙げられる。

英国のパストラル・ケアは、1980年代までにカリキュラム調整をしながら、生徒の教育・福祉的側面を支援していくことが必要であると認識されるなど、教科指導と生徒指導を融合した総合的な支援教育が構想されるようになった。1978年に提起されたウォーノック報告やそれに続く1980年代以降の特別ニーズ教育においても、単に特別なスタッフを配置し、特別な場における対応を可能にすることだけでは不十分であり、教科指導や生徒指導といった通常の学校の日常的な教育実践を捉え直し、実践的枠組みを再編成することが求められている。以上の点をふまえると、1950年代以降のパストラル・ケアの発展過程と特別ニーズ教育には多くの接点があると考えられる。

【注】

- 1) 文部科学省特別支援教育課資料「平成18年度幼稚園、小学校、中学校、高等学校等におけるLD、ADHD、高機能自閉症等のある幼児児童生徒への教育支援体制整備状況調査結果について」(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/03/07030213.htm : アクセス日 2007年5月1日)
- 2) 平成17年度の情緒障害特殊学級設置数は10,503学級、在籍者数は28,924人であったのに対し、平成19年度の情緒障害特別支援学級設置数は12,727学級、在籍者数は38,001人に増加した。
- 3) ドーズ博士は1959年～1969年までリーズ大学社会心理学部門の講師を務める傍ら、1965年～1969年まで職業ガイダンス研究ユニットの所長を兼任し、1960年代の職業ガイダンス、カウンセリング、パストラル・ケアに関する英国内の代表的人物であった。そのため、英国の教育推進協議会 (the Council for Educational Advance) が実施した全国会議 (national conference) において、「学校内のパストラル・ケア」というテーマで最初に基調報告を行っている。本稿では、そこでドーズ博士のパストラル・ケア論を、1960年代のガイダンス、カウンセリング、パストラル・ケアの基本的な方向性として取り上げた。
- 4) ベストは、1970年代にパストラル・ケアを捉え直し、さまざまな著作を通して英国内に新しい

パストラル・ケア概念を普及・啓蒙した人物である。

参考文献

- 新井英靖. 2000. イギリスの『学習困難児』問題への教育的トリートメントに関する一研究—1950年代から1960年代の通常学校における特別な教育の展開過程を中心に—. 『SNE ジャーナル』第5巻.56-78.
- 新井英靖. 2002. イギリス特別教育史の構想—第二次世界大戦後の『学習困難』問題と特別教育改革—. 『日英教育研究フォーラム紀要』第6号.99-108.
- 新井英靖. 2007. 英国の教育福祉サービスの発展過程に関する研究. 『学校ソーシャルワーク研究』. 第2号.2-11.
- 新井英靖. 2008. 英国インクルーシブ教育の展開と教育方法論の視座. 『現代カリキュラム研究と教育方法学』(教育方法37) .130-137.
- Bell. P. and Best. R.. 1986. *Supportive Education: an integrated response to pastoral care and special needs*, Basil Blackwell. Oxford.
- Best. R.. 1977. "Pastoral care".concept and process. *British Journal of Educational Studies*. Vol.25(2). 124-133.
- Best. R., Ribbins. P. and Jarvis. C.. 1983. Education and Care. *Heinemann Educational Books*. London.
- Braide. W.R., Daws. P., Hall. J. and Johns. A.. 1970. *Who Cares? A discussion of counseling and pastoral care in schools*. Council for Educational Advance London.
- Carnell. E. and Lodge. C.. 2002. *Supporting Effective Learning*. Paul Chapman Publishing. London.
- ダフネ・ジョンソン編著.岩橋法雄・福知栄子他訳. 1983. 『イギリスの教育と福祉 - 問われる学校の責任と限界 - 』. 法律文化社.
- Department for Education and Science (DES). 1968. *Psychologist in Education Services (The Summerfield Report)*. H.M.S.O.
- Department for Education and Skills (DfES). 2004. *Removing Barriers to Achievement: The Government's Strategy for SEN*.
- 藤井泰. 2004. 『イギリスにおける生徒指導の動向—パストラル・ケアの概念と実際を中心に—』. 松山大学論集.15 (6) .39-56.
- Galloway. 1989. *Special Educational Needs and Pastoral Care*. In Ramasut. A. (Ed.). Whole School Approaches to Special Needs. The Falmer Press. London.
- Haigh. G.. 1975. *Pastoral Care*. Pitman Publishing. London.
- Marland. 1980. "The Pastoral Curriculum". In Best. R., Jarvis. C. and Ribbins. P. (Ed.): *Perspectives on Pastoral Care*. Heinemann Educational Books. London. 151-170.
- Ministry of Education. 1955.*Report of the Committee on Maladjusted Children*. (The

- Underwood Report) .H.M.S.O.
文部科学省. 2005. 平成 17 年度特殊教育資料.
文部科学省. 2007. 平成 19 年度特別支援教育資料.
Moore. B.M.. 1970. *Guidance in comprehensive schools – a study of five systems*. NFER.
Slough.
Ofsted . 2004. *Special educational needs and disability; towards inclusive schools*.
Watkins. C. and Wagner. P.. 1987. *School Discipline: A whole-school practical approach*. Basil
Blackwell. Oxford.
Williamson. D.. 1980. *'Pastoral Care' or 'Pastoralization'?* In Best. R., Jarvis. C. and Ribbins P.
(ed.) *Perspectives on Pastoral Care*. Heinemann Educational Books. London.